

# 白雲片片

## 第二十一回

### 随喜稱名成佛決義三昧儀

先日幸いにも、ある御先祖より『随喜稱名成佛決義抄』(以下『決義抄』と略す)の訳本を頂戴しましたので、今回はこの訳本に関して紹介します。なお原文と訳本中では漢字の「称」は「稱」、「釈」は「釋」、「仏」は「佛」と全て旧字体で表記されていますので、この文中

では混乱を避けるため、全て旧字体で表記します。

『決義抄』は、『随喜稱名成佛決義三昧儀』(以下『三昧儀』と略す)の抄出本であり、『三昧儀』、『決義抄』ともに撰者は江戸末期から明治初期に活躍した栖川興巖老師—文政五年(一八二二)〜明治二十二年(一八八九)、諱は覚隆号は興巖—です。老師は信濃国(長野県)の佛教篤信の農家に生まれ、出家の願を抱いていましたが、家督を継ぐはずの兄が江戸へ赴いたまま消息不明だったためになかなか出家できずにいました。しかし成田不動尊に参拝し願を掛けて江戸で兄を捜したところ、ある家の養子になっていたところを発見し、興巖老師が

帰郷を勧めると兄は実家に戻って来ました。そこでようやく松代の長国寺二十世覚巖実明老師に就いて出家することができました。老師三十三歳の時と伝えられています。その後、師匠が早くに遷化したため、兄弟子の千巖覚道老師に就いて嗣法しています。

そして明治二年当時、廃寺同然となっていた大阪の真言宗妙寿寺を曹洞宗寺院として再興し、覚巖実明老師を開山に請して自らは二世となり、妙寿寺を本拠地にしてその後の活動をされています。『三昧儀』の内容を要約すると、仏祖正伝の宗旨を示すため、そして衆生を絶対無二の大恩教主である釋尊に帰依せしめるため、『南無法王釋迦牟尼如来、無

量寿命世尊りようじゅみょうせそん」、もしくはただ単に「南無

釋迦牟尼佛」と稱名することを勧め、稱名することでこの娑婆世界が即ち、釋尊および諸佛が住す常寂光土の世界として具現し、稱名する者は即身成佛(七)する（稱名するものが生身のまま、生きている間に自分が佛であることを自覚し佛として生きる）ことを説いています。そして特に「南無釋迦牟尼佛」の稱名は「高祖傘松そさんしょうの嚴訓」であり、稱名の規則とされ、道元禪師の教えに基づいていると



興巖覺隆大和尚坐像

しています。この点について調査したところ、『正法眼藏』の中には「南無歸依十方佛」や「南無佛」、「南無歸依佛・法・僧」といった表現は多くございますが、「南無法王釋迦牟尼如来、無量寿命世尊」、「南無釋迦牟尼佛」といった具体的な稱名らしい表現はございませんでした。しかし、その他の資料を調べてみると、『永平広録』の巻一・九八に「浴佛上堂（中略）南無釋迦牟尼佛 香水洗頭 浴老兄（中略）下座」とありました。この部分は、道元禪師が降誕会に際して行った説法を弟子達が記録し編集したものであると思われ（巻一の編集者は当時、道元禪師の侍者だった詮慧和尚せんね）。また、道元禪師の伝記本『永平開山行状建擗えいへいかいさんぎょうじょうけんぜい』

記き』収録の『道元禪師和歌集』には、梅花流詠讚歌『大聖釋迦牟尼如来御詠歌（紫雲）』の典拠である「草庵に 寝てもさめても 申す事 南無釋迦牟尼佛 憐み給へ」という和歌が収録されていました。以上、私が調べた限り、これが正確な記録か、道元禪師真撰の和歌かどうかはさて置き、「南無釋迦牟尼佛」もしくはそれに類似した稱名らしい表現は、現在流布している道元禪師関係の資料の中から二箇所しか発見できませんでした。老師がどの部分に着目されたのかは、「高祖傘松の嚴訓」とされたのかは今一つ判然としませんでしたので、この点については今後の課題とします。

次に『三昧儀』がどのような理由から

撰述されたのかをまとめてみます。明治十三年に狩野逸郎氏（白堂居士）が著した『三昧儀』の注釋書『随喜稱名成佛決義三昧儀疏』（上下二卷）の巻頭に、老師自ら執筆した序文がありますので抜粋して掲載します。

—今、開明の世に當つて、専ら在家の男女に勸むるに、直捷簡便を要す。故に宗祖の格言に基づいて、諸經の要文を採取し、此の三昧儀を製す。

晨昏に法主の名号を稱讚し、即心成佛の義を決して、以て一宗安心の真訣を示すなり。此の書に南無法王釋迦牟尼如来、無量寿命世尊と稱すと雖も、通途に稱名の規則を論ずれば、唯だ南無釋迦牟尼佛と稱すべし。是れ高祖傘松の嚴訓なり。

— 訳本を拝読すると、明治元年に政府が発した「神佛分離令」に始まる廢佛毀釋という佛教界にとって危機的な状況の中で、特に在家者のために撰述されたものであると説明されています。『三昧儀』が撰述されたのは明治九年であり、曹洞宗が宗門を掲げて在家者向けの聖典として『修証義』を發布したのが明治二十三年ですから、それに先立つこと十四年となります。また訳本には、

—『随喜稱名成佛決義三昧儀』の注釋書である『随喜稱名成佛決義三昧儀抄講話』を著した忽滑谷快天師は、その著書の中で、「されば師は明治時代に於ける曹洞宗布教の革新を計った第一人として私は

尊敬して居るのであります」（九〇ページ）と述べている。（中略）『曹洞宗日課聖典』には（中略）日本では道元禪師（一一一〇—一二五三）の『正法眼蔵』からの抜粋である『修証義』と、この『随喜稱名成佛決義三昧儀』の抄出本『随喜稱名成佛決義抄』のみが収録されている。このことから推しても、いかにこの『随喜稱名成佛決義三昧儀』が、重要な經典であるかをうかがい知ることができるのである。（中略）そのような明治という時代を背景として、この『随喜稱名成佛決義三昧儀』は撰述されたのである。興巖師は、廢佛毀釋断行の全責任を、祭政一致の復古精神を主張した平田篤胤学派らにあるのではなく、伝統佛教の上にあぐらをかいてきた僧侶の側にあ

ることを言いたかったのである。興巖師は、自らその責任を痛感し、全宗こそぞって、いまこそ釋迦牟尼如来の本義に立ち返ることを主張したのである。」——ともありません。さらに、駒沢大学教授だった酒井得さかいとく元げん老師は訳本に序文を寄稿し、その中で次のように述べています。

——それまで「南無釋迦牟尼佛」の稱名は、宗門には殆んど行われていなかった。この『隨喜稱名成佛決義三昧儀』の著述はこの稱名を先鞭するものであった。これによつ



大正3年版『三昧儀』経本  
著者所蔵

て宗門は新しい眼を開くことが出来て、や

がて『修証義』を現成させたのであった。かくて『修証義』の現成によつて、今日の宗門の正信のあり方は大成されたのであったが、却つて、この大成の契機をなし、その基盤を醸成した老漢の労作が、一般から忘れられてしまったのであった。——

今日、「南無法王釋迦牟尼如来、無量壽命世尊」の稱名が広く行われているとは思えません。宗門が稱名を勧め、稱名は出家在家問わず、ごく普通にされているかと思えます。宗門が稱名を勧めているパンフレットなどもよく見かけますし、墓地に行けば墓石の棹石さおいしに「南無釋迦牟尼佛」と彫つてあるものを頻繁に見かけます。在家者の立場になつてみれば、難しく感じられる仏教理論や苦行

の印象が強い坐禪よりも、分かり易く簡単な稱名のほうが親しみ易く、実践が長続きするのは無理ありません。老師は日本仏教史上未曾有と言える状況の中、宗門でもそのことをいち早く察知し、荒波の中で弘済の一念を貫き、宗門の未来を切り開いたのです。

動乱の時代を生き抜いた老師が危機感を覚え、在家者の救済と佛祖への報恩、そして新たな時代に向けた布教の先鞭を著けられたことに対し敬意を表し、拙文ながら紹介とします。参考文献／栖川隆道発行・大野榮人執筆『隨喜稱名成佛決義抄釋』、駒沢大学編『禅学大辞典』、大久保道舟編『道元禅師全集上下巻』